

春の風に揺れる桜。梅雨に咲く紫陽花。秋の空を覆う紅葉。壁に映る木漏れ日のゆらめきや、絶え間なく移ろう、水面のきらめき。何気ない武蔵の日常で、ふと目にするこれらの風景には、その前を通りかかるたびに、思わず足を止めてしまうような、「何か」があります。この六年間を通して、私が何度も味わったその「何か」とは、ここを去る今になって思い返すと、この武蔵という場所が持つ「かけがえのなさ」に触れる感覚だったのかもしれない。

けれども、入学当時の私たちは、この場所に来ることが許されませんでした。私たち一〇〇期の歩みは、六年前、世界を襲った新型コロナウイルス流行の真っ只中で始まったのです。入学式は延期され、記念祭は中止になり、画面越しの授業によって、私たちの武蔵生活は始まりました。先の見えない、暗いトンネルのような、不安な日々が続いたことを覚えています。

それでも今振り返ってみれば、あのコロナの日々は、武蔵での六年間のほんの始まりに過ぎなかったのだと、はっきりわかります。もちろん、対面授業の再開後も、私たちの生活にはさまざまな制約が残りました。しかし、そうした抑圧があったからこそ、私たちには、主体的に行動を起こそうとする姿勢が育まれたように思います。ただ目の前の現実を嘆くのではなく、自ら調べ、自ら考え、できることを探していく。私たち

は一人ひとり違っていて、けれども、どこかとてもよく似ています。それぞれが得意分野を持ち、互いに敬意を払い、影響を与え合いながら、団結未満、競争以上、そんな距離感で、この六年間をともに過ごしてきました。プログラミングを極める者。独自の研究に取り組む者。バンド活動に打ち込む者。サッカーやバスケの大会で活躍する者。行事運営に尽力する者。帰宅部としてゲームの世界を追求する者。書物と対話し己の思索を深める者。それぞれがやりたいことを、存分にやり抜くことのできる武蔵は、私たちにとってかけがえのない居場所でした。

ここで、少しだけ私自身の話をさせてください。この六年間で、私が勉強の傍ら、最も打ち込んだものは映画作りでした。脚本・撮影・出演など、さまざまな分野で協力してくれた友人たち、研究室を訪ねるたびに、率直な感想や助言をくださった先生方、年に一度の記念祭という、最適な発表の機会、そして何より「何かを好きであること」が肯定される武蔵の校風そのものが、私の映画の大きな支えでした。私たち十代は、自分の成果を、自分の才能や努力によるものだと思いがちです。けれども、その全ては、支えてくれる環境あってこそ成り立つものだということを、忘れないでおきたいと思います。

今、私たちは武蔵を離れ、外の世界へと、新たな一步を踏み出そうとしています。今日の世界、それは各地で戦火が広がり、技術革新が急速

に進み、国際秩序を主導する大国を失った、先の見えない世界です。従来の常識や価値観の多くが、崩壊し、変化していく大きな渦の中に、私たちは生きています。だからこそ、武蔵で培われた自らの道を切り開いてゆく姿勢は、私たちのこれからの人生において、大きな支えとなるはずです。

これからも、私たちの原点の一つには、きつとこの武蔵という場所があり続けることでしょう。春の風に揺れる桜。梅雨に咲く紫陽花。秋の空を覆う紅葉。壁に映る木漏れ日のゆらめきや、絶え間なく移ろう水面のきらめき。こうした風景の中に、「かけがえのなさ」を感じるのは、あくまで私にとっての武蔵の見え方に過ぎません。けれども、武蔵という学校が、それぞれにとっての「かけがえのなさ」を湛えている、広く豊かな場所であることは確かです。私たちは、武蔵で過ごした六年間の記憶を胸に、これからも、それぞれの道を歩んでゆきます。

最後に、ご指導してくださった先生方、お世話になった職員の皆様、そして、いつも支えてくださった保護者の皆様に、心からの感謝と敬意を表し、武蔵高等学校・中学校のますますの発展を願って、私の答辞といたします。

令和八年三月十八日 渡辺創介